

図 2.5-3 坑跡に沿う三次元断面図およびVSPイメージング断面図の対比 (縦軸は往復走時)

2.5.5 圧入テスト結果

圧入テストは、CO₂の圧入性および貯留層評価に必要なパラメーター（圧入指数、浸透率）の把握を目的として、苫小牧CCS-1においては滝ノ上層T1部層で2回（No.1圧入テストおよびNo.2圧入テスト）、萌別層砂岩層で2回（No.3圧入テストおよびNo.3a圧入テスト）の水圧入テストを行った。

1) 滝ノ上層T1部層

7) No.1圧入テスト（対象区間：掘削深度3,382～3,698mの区間内で66m分）

- ・産出能力テストおよび圧入能力テストを実施したが、産出が見られず、圧入も不可能であった。
- ・上記結果および産出・圧入後の坑底圧力の解析結果から、本坑井周辺では低浸透性でほとんど圧入性は無いと判断された。

4) No.2圧入テスト（対象区間：掘削深度2,907～3,289mの区間内で120m分）：

- ・産出能力テストでは最大レート約400kl/日での産出を確認した。累計産出量は157.4klであった。地層水は泥水の影響を受けており、圧入井掘削時に地層水を採取する必要がある。
- ・圧入能力テストでは最大650kl/日のレートでの水圧入を実施した。累計圧入量は129.5klであった。
- ・産出・圧入後の坑底圧力の解析結果から、本坑井周辺での貯留層の浸透率は0.68～1.18mD程度であると推測された。また、坑井近傍の浸透率が改善していることを確認した。
- ・2.7.3項で述べる3Dデータを使用した岩相分布・性状分布の推定結果と比較すると、苫小牧CCS-1付近には高浸透性の岩相は存在しない可能性が高いという結果を得ている（苫小牧CCS-1の近傍は、図2.7-2における橙色の部分に当たっているが、図2.7-3における低A1（青色）の部分には当たっていない）。

2) 萌別層砂岩層

7) No.3圧入テスト（対象区間：掘削深度1,150～1,182mの区間内で17.5m分）

- ・産出能力テストは、自噴しないことから実施しなかった。地層水は圧入井掘削時に採取する必要がある。
- ・圧入能力テストでは最大300kl/日のレートでの水圧入を実施した。累計圧入量は97.7klであった。

- ・圧入後の坑底圧力の解析結果から、貯留層の浸透率は25mD程度であると推測した。

イ) No. 3a 圧入テスト(対象区間:掘削深度1,077~1,217mの区間で57.5m分^{注)})

- ・圧入能力テストでは最大1,200kl/日のレートでの水圧入を実施した。累計圧入量は248.5klであった。
- ・圧入後の坑底圧力の解析結果から、貯留層の浸透率は9mD程度であると推測した。

注) No. 3a 圧入テストの対象区間は、No3 圧入テスト対象区間に40m分の区間を加えて実施した。

2.6 苫小牧CCS-2調査結果の概要

2.6.1 掘削結果

2011年5月4日から6月15日までの43日間で、苫小牧CCS-1の北東37mの位置において深度1,218mまで掘削した。調査終了後は、耐CO₂セメントを用いて埋め立てた(廃坑作業を実施した)。

2.6.2 地質調査結果

苫小牧CCS-2の深度993~1,218mの萌別層泥岩層および砂岩層において、直径8cmのコア試料を連続採取した。掘削後は、苫小牧CCS-1との比較を目的として物理検層を実施した。

コア試料を用いて岩石物性分析により以下を確認した。

1) 萌別層砂岩層

- ・孔隙率: 25~40% (封圧下)
- ・空気浸透率: 1~1,000mD (封圧下)
- ・不動水飽和率: 27~75% (平均51.5%、遠心分離法、1.6MPa相当)

2) 萌別層泥岩層

- ・孔隙率: 32.4~37.2% (封圧下)
- ・水浸透率: $0.80 \times 10^{-2} \sim 1.73 \times 10^{-3}$ mD
- ・スレシヨルド圧力
 - 孔径分布からの推定: 0.14~1.56MPa
 - 段階昇圧法(CO₂-水系): 0.75~1.67MPa

2.6.3 リークオフテスト結果

深度 989～993m の萌別層泥岩層下部において、遮蔽層強度を測定することを目的としてリークオフテストを実施した。その結果、テスト区間の中央深度 991m におけるリークオフ圧力は 14.6MPa であり、等価泥水比重 1.50 であることがわかった。

2.7 滝ノ上層解析結果

2.7.1 貯留層

滝ノ上層は火山性碎屑物を含む火山岩層であり、火山岩・凝灰岩からなる滝ノ上層 T1 部層とその下部の泥岩層からなる。滝ノ上層 T1 部層（層厚が約 600m）は、さらに下部の溶岩～凝灰角礫岩卓越層と上部の凝灰岩卓越層とに分けられる。

図 2.7-1 は、調査地点周辺の既存坑井の滝ノ上層 T1 部層における溶岩～凝灰角礫岩および凝灰岩の孔隙率と浸透率の関係をプロットしたものである。本層では、溶岩～凝灰角礫岩相では良好な圧入性状が期待できることから圧入対象となると考えた（図 2.7-1 青い楕円部）。また、凝灰岩相全体としてはそれほど良好な性状は期待できないが、部分的に高い孔隙率を有する領域が存在し、圧入対象となると考えた（図 2.7-1 赤い楕円部）。実地調査から得られた貯留層性状の概要を表 2.7-1 にまとめる。

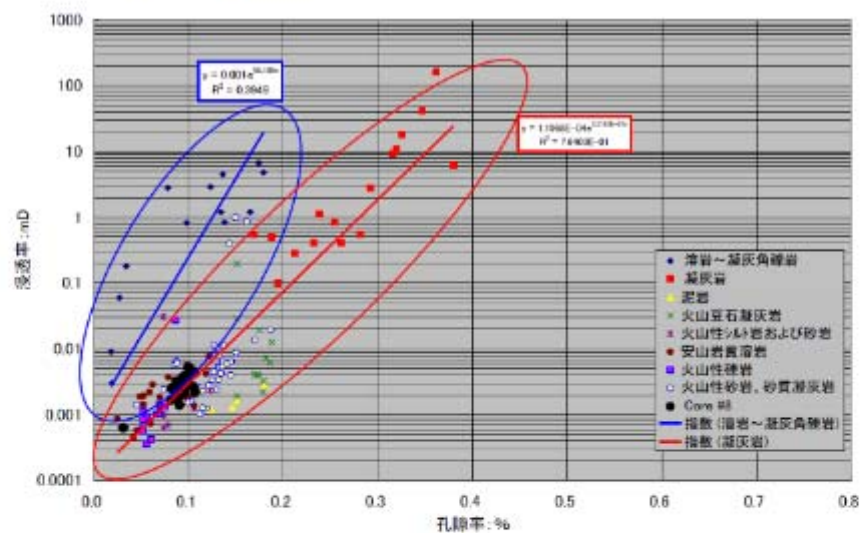


図 2.7-1 コア試料の孔隙率と浸透率のクロスプロット

表 2.7-1 滝ノ上層 T1 部層 貯留層性状一覧

| 項目 | |
|----------------------|--|
| 対象深度 | 約2,400～3,000m(垂直深度) |
| 層厚 | 約800m |
| 岩相 | 溶岩～凝灰角礫岩、凝灰岩 |
| 孔隙率 | 5～18%(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下) 3～19%(周辺坑井のコア試験:封圧下) |
| 浸透率 | 0.68～1.18mD(苫小牧CCS-1圧入テスト解析結果)* 0.001～0.01mD(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下、空気) 0.002～7mD(周辺坑井のコア試験:封圧下) 0.01mD～2.6D(坑井Aでの物理検層解析結果) |
| 水圧入テスト (苫小牧CCS-1) | 最大650kl/日(掘削深度2,907～3,698mのうち186m)* |

*圧力・温度測定結果から圧入区間は2,907～2,931mのみと判断した。

2.7.2 遮蔽層

遮蔽対象層となる振老層および平取+軽舞層は、約1,100mの層厚を有する。苫小牧CCS-1におけるリークオフテスト結果から、振老層下部で等価泥水比重1.96の強度を持つことを確認した。

苫小牧沖構造の西翼には断層が存在するものの、振老層および平取+軽舞層は主に泥岩からなることと、周辺坑井データを用いた地層水塩分濃度分布と地層圧力分布から、過去に遮蔽層を超えた垂直方向の地層水の移動はないと考えられる。

振老層で採取したコア試料では、水浸透率が 8.2×10^{-6} ～ 36.7×10^{-6} mD、スレシヨルド圧力が1.29MPa～15.02MPa以上の実測データが得られている。後者については、1.29MPaといった比較的低い分析値が得られているものの、CO₂貯留条件と同様の条件で分析をしたところ、11.72MPa以上の値が得られている。

以上の条件・データから、振老層および平取+軽舞層は、良好な遮蔽性能を有する地層であると考えられる。実地調査から得られた遮蔽層性状の概要を表2.7-2にまとめる。

表 2.7-2 滝ノ上層 T 1 部層に対する遮蔽層性状一覧

| 項目 | |
|-----------------------------------|--|
| 層序 | 振老層および平取+軽舞層 |
| 岩相 | 泥岩 |
| 層厚 | 約1,100m |
| 孔隙率 | 12.4~18.0%(苫小牧CCS-1コア試験:封圧下) |
| 浸透率 | $8.2 \times 10^{-6} \sim 36.7 \times 10^{-6} \text{mD}$ (苫小牧CCS-1コア試験:水浸透率) |
| スレシヨルド圧力 | 1.29~12.3MPa [※] 以上(苫小牧CCS-1コア試験: N ₂ -水系残差圧力法) 11.72MPa [※] 以上(苫小牧CCS-1コア試験: CO ₂ -水系段階昇圧法) <small>※フリースルーしなかったことから測定値以上のスレシヨルド圧力を有すると判断。</small> |
| リークオフ圧力 (苫小牧CCS-1 リークオフテスト) | 45.3MPa(等価泥水比重1.96) (振老層(苫小牧CCS-1)2,352mVD(垂直深度)) |

2.7.3 地質モデル構築

(1) 岩相分布・性状分布の推定

滝ノ上層は、火山岩起源であることから、砂岩などの堆積岩層と比較して不均質性が高く、CO₂挙動予測シミュレーションを実施するためには、空間的な岩相分布およびその性状分布の推定が特に重要となる。このため、3Dデータを活用した岩相分布・性状分布の推定を実施し、CO₂挙動予測シミュレーションの地質構造モデルへ反映させた。

具体的には、まずスケルトン・アトリビュート解析と呼ばれる手法を用いて弾性波形の特徴を強調し、次にSOM (Self-organizing Maps: 自己組織化マップ) 解析による波形分類を行い、さらにクラスター解析の代表的な手法であるK-means法により各分類の境界を決定し、最後に坑井Aにおける溶岩～凝灰角礫岩の区間との比較により、この岩相を示す弾性波形を決定することにより、3Dデータ上で溶岩～凝灰角礫岩の分布領域を推定した。

そして、溶岩～凝灰角礫岩についてはコア試料と物理検層データから、AI (Acoustic Impedance: 音響インピーダンス: 密度×弾性波速度) と孔隙率とが逆相関関係にあることから、3Dデータ上も溶岩～凝灰角礫岩の分布領域ではAIと孔隙率とが逆相関関係にあると考えた。

一例として、図2.7-2に滝ノ上層T1部層下部の岩相分布(K-means Index)を、図2.7-3に3Dデータから取得した滝ノ上層T1部層下部の音響インピーダンスを示す。

なお、苫小牧CCS-1が掘削された場所周辺は、高AI領域(孔隙率・浸透率が低い)

であった。

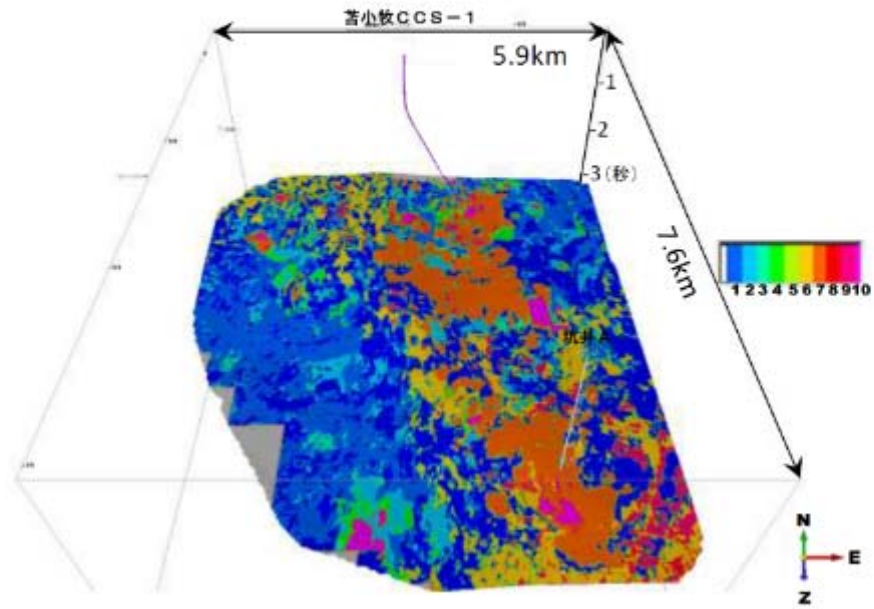


図 2.7-2 滝ノ上層 T1 部層下部の岩相分布 (K-means Index)

注) オレンジの部分が良好な貯留層性状が期待される岩相 (溶岩～凝灰角礫岩相)

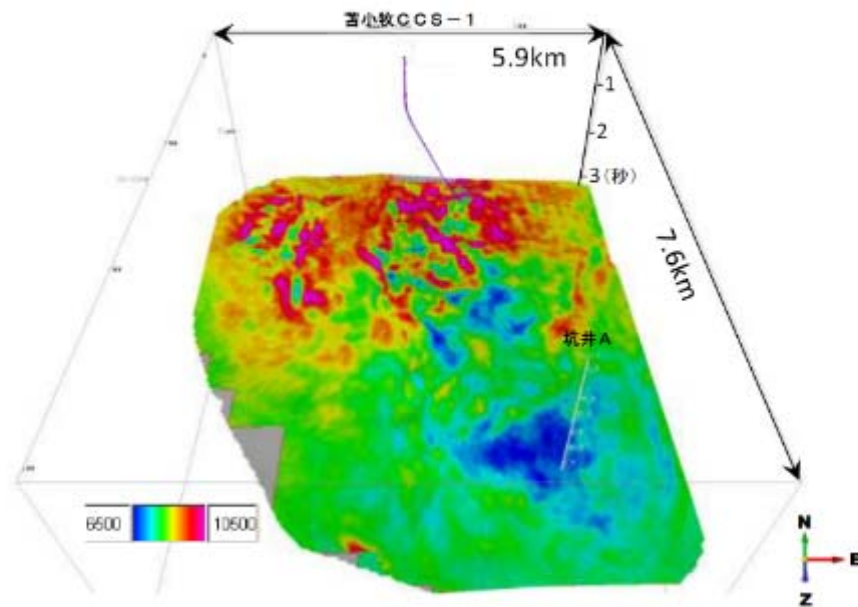


図 2.7-3 滝ノ上層 T 1 部層下部の音響インピーダンス

注) 青色の部分が低 A I で高孔隙率と考えられる箇所。高浸透率である可能性も高い。

(2) 地質構造モデル構築

CO₂の挙動予測シミュレーションに必要な貯留層モデルを構築するため、3Dデータで解釈に用いた各層準の時間構造を深度構造へ変換した。

地質構造モデルの構築には、構造地質解釈で作成された層準（上位より、第四系基底・鶴川層基底・萌別層基底・荷葉層上部基底・荷葉層下部基底・平取+軽舞層基底・滝ノ上層上限（振老層基底）・滝ノ上層 T 1 部層上部基底・滝ノ上層 T 1 部層基底・滝ノ上層基底）を用いた。深度変換された滝ノ上層 T 1 部層上限のモデル断面位置を図 2.7-4 に、主要な層準の東西断面（地質モデル断面）を図 2.7-5 に各々示す。

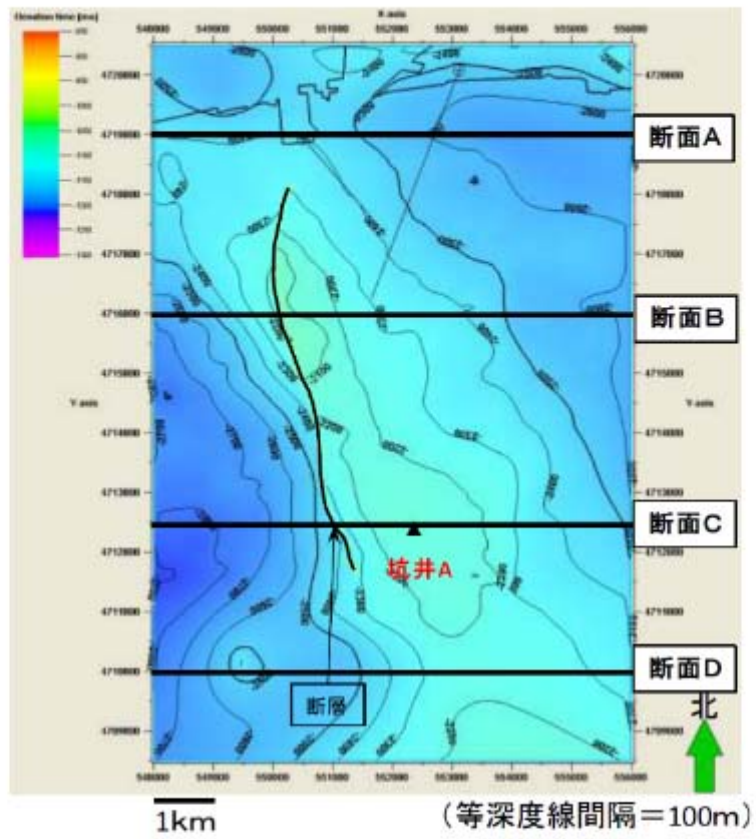
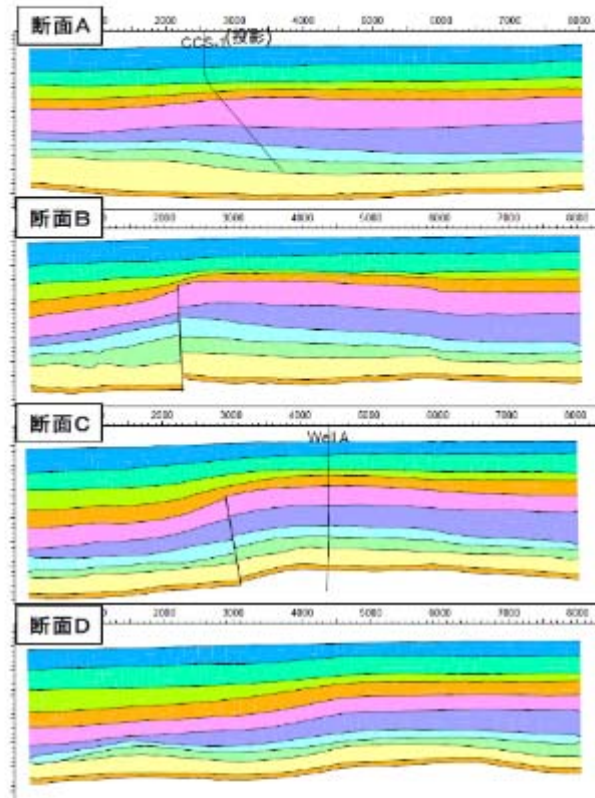


図 2.7-4 モデル断面位置 (構造図は滝ノ上層 T1 部層上限)
 (図中の X 軸および Y 軸は世界測地系 WGS84 の UTM54 系の座標)



- 第四系
- 鷺川層
- 萌別泥岩層【遮蔽層】
- 萌別砂岩層【貯留対象層】
- 荷葉層【遮蔽層】
- 平取+軽舞層【遮蔽層】
- 振老層【遮蔽層】
- 滝ノ上層T1部層(上部)【貯留対象層】
- 滝ノ上層T1部層(下部)【貯留対象層】

図 2.7-5 地質モデル断面
(苫小牧 CCS-1 は投影表示)